

『城砦落とし』

かつてここには畑や牧草地が広がっていた。その痕跡がそこかしこに見える。しかし今は青々と茂った牧草も、黄金色に輝く麦畑もなく、荒涼とした荒地が見渡す限り続くばかりだ。

たよりない道筋を一台の馬車が行く。残された数少ない痩せた家畜に食わせる為だろうか。荷台には枯れた麦株ばかりが載せられている。御者台にいるのもくたびれた老農夫だ。

しかしその隣に座っているのは、貧しい農村に似つかわしくない人影だった。フードとマントで身を覆っているが、その端から見える鎧は磨き上げられたものだ。何も解らない農夫にさえ、魔法の力が宿っている事が解る。

相手は子供と言っている背丈しかない。襲い掛かって身ぐるみはごうか？

しかし老農夫はその不埒な考えを一瞬で否定した。

フードの間隙から見える、深い清冽な藍色の瞳に射抜かれた瞬間、自分の邪な考えを見破られたような気がしたからだ。

やがて枯れ果てた草しか生えぬ丘の向こう側に領主の城が見えた。かつてそれは領民たちの拠り所だった。だが今では遠い昔の事と思える。一年ほど前にかつての領主が今の城主に倒された時、状況は一変した。

それまでは周辺農村の守護者の砦であったが、今では略奪を事とする暴君の居城になっている。農地、農民を外敵から守っていた勇壮な騎士や兵士たちは皆殺され、あの城にいるのは時折思い出したように農村に襲い掛かるオークやホブゴブリンどもばかりだ。

老農夫は、本当はこんな場所を通りたくなかった。しかし握らされた銀貨の重みが恐怖を麻痺させた。

「ここがいい。ありがとっ」

どう考えてもその声は少女の物だった。しかし物言いは固く抑揚はない。重い武装も軽々と手馴れた様子で運んでいる。

「城から煙があがったら、村人達と様子を見にくるがいい」

立ち振る舞い、言葉使いは気品がある。どう考えても騎士か貴族の娘だ。

そして全身から淡く光を発している。気おされするような清冽な威圧感。老農夫の言葉使いは自然と丁寧なものになった。

「何が起るんでっ」

少女は素気なく言った。

「自分の目で確かめるといい」

その足で彼女は城へと向かった。農夫は逃げるように馬車を走らせる。何が起るか解らない。だが何か起る予感があった。村の者たちに知らせなければならなかった。

城の正門を指呼に収める場所で、少女はフードとマントを取った。

不思議な光沢を放つ鎧が踝まであるスカートのようなサーコートから覗いて見える。

大振りの剣は少女が持つには相応しくなく、しかし使い慣れた様子で抜き剣の輝きを確認する。

それにも強い魔法が込められているようだ。脱いだフードとマントを背中のザックに入れる。

代わりに大きな盾を取り出す。どう考えてもザックには入らない大きさだ。

そのザックも魔法の品のようだ。そして盾も彼女のかたわらで浮んでいる。

高価な魔法の装備で固めた彼女は年端も行かぬ少女だった。まだ十五歳を越えたばかり。しかし物心ついた時から正規の騎士団に属した彼女は、十歳で騎士叙勲を受けた強者だった。

今ほどの騎士団に属さぬ。善なる軍神の召命を受けた時から、彼女は人ですらなくなったのだから。

金色の一本に編み上げられた三つ編みを重々しく振る。

乳白色の肌は、その柔らかさ弱々しさからは想像できぬほどに城の周りの荒野を走る風を拒否した。そして全てを射抜くかのような暗く清冽な藍色の瞳。

笑えばきつと愛くるしい娘である。しかしその珊瑚色の唇は、笑みを浮かべる事など絶えてなかった。

彼女の藍色の瞳が城の正門を睨む。意を決したように、彼女は静かに歩き出した。

城門には二匹のオークがたむろしていた。人間よりもやや大柄。牙を生やした豚のような顔立ち。

腕力を誇り、腕力で全てを決したがる種族。彼らにとつての法則はただ一つ。強さが全てだった。弱い者は搾取されるだけなのだ。

強い者には従う。しかし規律に従うような連中ではない。人間のゴロツキを想像すればいい。

薄曇りの天気。風は強い。そんな中、無造作に武装した人間の少女が近付いてくる。何かの間違いか、それとも頭の中身が薄いのか。オークたちは小柄な少女の姿を見て嘲笑いつつ、使い慣れた斧を手にする。手入れなどしていない。

相手を殴り殺す為だけの粗野な武器だ。

相手が素直に戦ってくれると見て、少女は剣を両手に持ち縦に構えた。

宣誓する騎士の仕草。だが彼女の珊瑚色の唇から漏れたのは、峻烈な己が信条だった。

「夢もなく、恐れもなく。我が定めに従い、ただひたすらに剣を持って悪を・・・」

それは完全武装した重装鎧を着た騎士の足ではなかった。

あつという間にオークは間合いを詰められ、呆然としている間に致命的な一撃を受けた。

「撃つー」

オークは瞬時に城壁に弾き飛ばされた。それは斬られたというよりも殴り飛ばされたといった方が良かった。

討たれたオークの体は明後日の方向に捻じ曲がっている。

何が起こったか解らぬもう一匹は、それでも戦いを本能とするオークの性に従い、斧を振るった。だが彼女はそれを軽くないです。深々と剣はオークの喉元を突き刺し、瞬時に命を奪った。

城門の内側にやすやすと侵入したからには、目指すは城主のいるキープのみ。彼女は浮んだ盾を共に連れ走り出す。しかし城内の反応は早い。魔法的な警報が鳴り響いたのだろう。衛兵は飾りのようだ。

わらわらと宿所から数人のオーク兵が現れる。物も言わずに斧を振るう。警報は『善』の者にしか反応しない。

『善』と『悪』とが非妥協的な戦いを繰り返す世界だ。『善』ならば殺すだけだ。

それは少女にとつても同じ事だった。『悪』ならば殺すだけだ。他の者ならば違う方法もあるかも知れない。だが物心ついてから剣しか知らぬ彼女には、剣を振るうより道はない。

オーク兵は彼女の敵ではない。一匹、また一匹と浮遊盾に攻撃をかわされ、彼女の太剣の餌食になっていくだけだ。

「たった一人の侵入者……浮遊盾……金髪の、人間の小娘……『城砦落とし』か！」

トラフスは学問的に魔法を扱う珍しいホブゴブリンだった。ホブゴブリンは兵士だ。規律を重んじ隊列を組んで弱き者を殺す。強き者とも戦う。精強無比の兵士たち。そんな種族の中で魔法を学ぶというのはよほどの変わり者だ。

変わり者ゆえに馬鹿にされる。それを見返そうと必死になる。今ではその呪文の力を恐れられる一端の賢者と畏怖されていた。

だが『城砦落とし』と呼ばれる騎士ボルメリア・ランキンの噂はトラフスの評判どころではなかった。村々に暴政をしく支配者たちを、たった一人で壊滅させていく馬鹿げた話。

魔法使いの呪文も通じず、あらゆる強者を正面からねじ伏せ、城の兵士を皆殺しにしてやっと思止まる。

『城砦落とし』の二つ名は『悪』と呼ばれる存在から嘲笑と、そして畏怖を持って語られた。

たった一人で正面から乗り込み、暴虐な支配者たちを滅ぼせば、そのままどこかへ行ってしまう。

それなら彼女をやり過ぎした後、また城に戻って村々を支配すればいい。誰もがそんな事を口にしていた。

彼女は暴政を行う支配者を滅ぼせば満足なのだ。彼らを排除すれば後の事は知らぬとばかり、次の城へと旅立つていく。

うまく良心的な支配者が後釜に座ればいい。農民達が自分たちの事は自分たちでやっていこうと決めるのもいい。

だが荒れ果てた城の支配者には、住まいをかまわぬオークやゴブリンどもが多い。結局は元の木阿弥だ。

しかし上手くやり過ぎた者の話は聞かない。

『城砦落とし』とやりあえば、運良く逃げおこせる事ができなければ殺されるしかないのだ。

彼女と事を構えて無事にすんだ連中はいない。

「トラフス師よ、どうすればいい？」

ホブゴブリンの隊長が問う。つぶれた犬のような顔には服従と献身の意思がある。オーク兵たちはあらかたなぎ払われた。隊長はとりあえず防戦を指示したが、訓練されたホブゴブリンの兵士たちとて時間稼ぎにしかならない。

善なる軍神の召命を受け、その眷属に生きながら列せられた彼女は疲れを知らぬ。

「力技で倒せねば、呪文を使うまでだ」

トラフスの代わりに小賢しい呪文使いが口を挟む。

感覚的に魔法を使うそのゴブリンはいつかトラフスを追い落とそうと思っているのだ。

体格のいいホブゴブリンに比べてゴブリンは小さな醜い体しか持たぬ。その僻みからも、彼はトラフスを憎んでいる。

トラフスが止める間もなく、最後のオーク兵もろとも爆発の呪文で吹き飛ばした。哀れなオークの肉片が空中に舞う。しかし目敏いトラフスは『城砦落とし』の体を半円形に守る透明なものを目撃した。

兵士たちの歓声が派手な爆発に対して上げられたが、しかし爆発の向こう側から無傷の『城砦落とし』が姿を現した時、歓声はどよめきに変わった。

やはりこの程度の呪文では彼女の魔法防壁を破る事はできない。やはり奴には力で対するしかない。

雄叫びが上がる。オーク兵の元締めであった者が手下を皆殺しにされ怒りの声をあげている。

それまでのオーク兵とは違う。屈強な戦士だ。

次の敵を見つけたボルメリアは大柄なオーク戦士に挑みかかる。力任せに戦士は斧を振った。

その力にボルメリアの足が止まる。盾と剣で、連打を浴びせるオークの斧を必死に凌いでいるように見える。

再び歓声があがったが、トラフスはそれを見ていない。

「ギャラウは何処にいる。早く奴をこちらに寄越せ。あの最後のオークが時間を稼いでいるうちにな」

ホブゴブリンの隊長は委細問わぬ。暴虐の中にありながら服従と秩序が彼らの習いだから。

ボルメリアはオーク戦士の力押しに押されているように見える。だが彼女の立ち位置は変わっていない。

猛烈な連打にも関わらず一步も後に引いていない。清冽な藍色の瞳に怯みはなく、盾の影から注意深くオークの動きを見ている。

一瞬オーク戦士の腕の動きが鈍った。すかさず繰り出された突きがオークの右脇に吸い込まれる。

血とともに力が抜けたオークが怯む。猛攻を加えるのはボルメリアの番となった。浮遊盾が邪魔にならぬように背に回る。

大剣を両手に持った彼女が激しい打ち込みを開始する。一撃一撃に込められた力は、オーク戦士の必死の守りを突き崩していく。

ギャラウが間に合わぬか。トラフスがそう観念した時、一際大きな影がトラフスを覆った。

それは上半身ばかりが力強く発達した巨人だった。緑の肌に陰怪な顔立ち。

知性は乏しいが戦いの本能が彼を偉大な剣の使い手にした。彼にかなう者は、この城では城主しかない。

「きたか、ギャラウ」

『『城砦落とし』だって？まるでエルフだな。菜っ葉の味がしそうだぜ』

ギャラウは人型の生き物を好んで食べるトルルだ。基本的に何でも食うが、味の蘊蓄を喋るのが好きだ。

もつともホブゴブリンであるトラフスはよほど飢えなければ人型など食べないので、

ギャラウのお喋りにはいい加減な相づちをうっただけなのだ。

「奴に魔法は効きにくい。お前の力が頼りだ」

いいながらトラフスはギャラウの力、素早さ、体力を上げる呪文を次々にかける。視界の端には膝を折ったオーク戦士の姿が見えた。最後の防御を崩され、斧を落とし、ただの一撃で『城砦落とし』に首を跳ねられた姿が見える。

「雑魚は邪魔だ。下がらせるよ。チビのくせにえらく力が強い。殿さまは、どーせこれねーんだろ？」

「城主ごのは賓客の応対中だ。地獄からの使者だとか言うが・・・」

「地獄、地獄ねえ。それはこの事だと思いがな」

意外なギャラウの言葉にトラフスは耳を疑った。

「勘違いするなよ。俺は地獄が好きなんだ」

頬の歪みが微笑みを示したのか、ギャラウはホブゴブリンたちを押しつけボルメリアの方へと近付いた。

彼女の藍色の瞳が目の前のトルルの力量を測る。強い。しかし勝てぬ相手ではない。

先手はボルメリアが取った。ギャラウの超大型の剣の間合いは長い。懐に入らねばならぬ。

重装鎧を着ながら彼女の足は軽やかで早い。狙ったのはギャラウの足。

上半身ばかりを鍛えて、相手が懐に入らぬうちに撃ち殺す戦法をとるギャラウは、

そればかりで勝ってきた為に他の場所を鍛えていない。まずは相手を転倒させる。

だがギャラウの方も魔法の助力を得て俊敏だ。迫るポルメリアを素早く迎撃する。それを浮遊盾が火花とともに受け流す。ギャラウは剣が滑つてく感触を手にした。やはり上手い。

ポルメリアの足払い、しかしギャラウの敏捷な動きで不発に終わった。

面倒だな。捕まえるか。

ギャラウはそう感じた。超大型の剣で殴るよりも小柄なポルメリアを捕まえ引き裂いた方が楽であるように思えたのだ。だがそれには浮遊盾が邪魔だ。その大きさにも関わらずひらひらと軽く彼女の周りを守る盾は、ギャラウの剣を今一步のところで受け流す。その隙にポルメリアの剣がギャラウを引き裂く。

致命傷ではない。そして傷はすぐに塞がっていく。そもそもトルルは焼き殺さなければ殺した事にならない。

ポルメリアがその事に気づいて舌打ちをした時、ギャラウの剣が迫った。咄嗟に身をよじる。剣は鎧にすべり彼女の頬をかすめる。もう少し相手の打ち込みが深ければ顔が半分弾け飛んでいたところだ。

だがそれでもギャラウは妙な手ごたえを感じた。相手に打撃を与えたはずなのに、その手ごたえが薄いのだ。それに頬のかすり傷もあつという間に消えた。もう綺麗な乳白色の頬である。

「なるほど。一気に勝負をつけないと、お互い死にきれねーよーだな」
俺も魔法の剣なんだがなあ。

内心ギャラウはぼやいたが、どうやらそれもポルメリアを包む神の加護だか何だかの前には威力が薄れるらしい。しかも自分と同じ高速治療能力を持つ。魔法も効きにくい。ギャラウは羨ましくなってきた。

「ねえちゃんよ、その体はどこで手に入れた？」

トルルは巨人の言葉で話す。普通の人間では解らぬ。

だが善なる軍神の眷属となった彼女には、全ての話し言葉を理解し話す力を与えられていた。

「神の呼びかけに答え、いただいた」

「ちっ、善の神って奴か。俺も鞍替えるかな。その力は結構便利だからな」

「手に入れてどうする？」

ポルメリアには、これが相手の時間稼ぎだと思えた。トルルは治療能力を持つ。彼女が与えた傷を癒す時間を欲したのだろう。だが一縷の望みが彼女に会話を続けさせた。もしかしたら、私にも殺す以外の道があるのではないかと、そう思えたのだ。けれどもそれは一瞬の気の迷いだ。誰よりも彼女がそう思っていた。

「死にくいつて事は、今よりも殺せるって事だろ？」

「それでは神はお前を受け入れて下さらぬ」

「そうかい？」

今度はギャラウが仕掛ける。溜め込んだ全ての力を疾走に回したのか、ポルメリアはただ正面からそれを受けるしか暇がない。

『善』だの『悪』だの区別をつけたがるが、俺に言わせればどっちもどっちだ。どちらもお互いを殺す事しか考えちゃいない。

お前のその力だって、敵を殺す為のものだろうがよ！要は敵を殺す事。それだけだ。それがこの世の摂理つてもんよ！」

ギヤラウの力強い腕が伸びる。捕まっつてしまえば終わりだ。浮遊盾が間に入る。もどかしげにギヤラウは盾を捕まえ、遠くへ投げた。だがそのせいでポルメリアを押さえ込んでいる剣への意識が離れる。

一瞬の隙。ポルメリアはギヤラウの剣から抜け出し、彼の右足を弾き飛ばした。

ギヤラウの巨体が砂煙を上げて倒れる。足を再生させる時間を稼ぐため、ギヤラウはそのままで剣をポルメリアに振るつた。だが彼女はそれを読んでた。全力で溜めた一撃をギヤラウの不用意な一振りに向ける。超大型の剣はその大きさに似合わぬ涼しげな音を立てて空を飛んだ。弾き飛ばされたのだ。

ギヤラウは左手でポルメリアの体を捕らえる。それで終わりだ。武器はなくても引き裂けばいい。

しかしそれよりも早く、彼女の剣がギヤラウの鎧を貫き心臓をえぐつた。それでもギヤラウの左手は力を緩めぬ。更に貫く。ようやくギヤラウはポルメリアを放した。だが彼女は手を休めぬ。倒れたギヤラウの首を撃ち落とす。

しかしそれでもまだ足りぬ。ギヤラウの右足は再生をしている。剣だけではトルルを殺しきる事はできないのだ。

「かかれ！」

トラフスにはそれが解っていたから、ギヤラウの再生に時間を稼がなければならぬ。

周りを囲むホブゴブリンたちにもそれが解っていた。槍や剣を持ったホブゴブリンの兵士たちが一斉にポルメリアに襲い掛かった。

訓練された兵士に周りを囲まれるのは不利だ。ましてや盾を投げ捨てられた。

ポルメリアは周囲を見渡し、不用意な爆発呪文で燃えている資材を見つけた。すぐに彼女は走り出す。

彼女の意図を知ったトラフスが大声で喚くが無駄だった。

炎が効かないなら電撃で、と、よせばいいのに先ほどのゴブリンがまたも余計な事をした。

自分たちが日頃使っている低レベルな呪文では、そもそもポルメリアの魔法防御を突破できないのに、である。

味方だけを吹き飛ばし、結局彼女に通り道をつくってやっただけだ。

トラフスはゴブリンの術者に炎の呪文を投げた。味方を混乱させるだけの術者など不要だ。

だが、時既に遅し。

燃えた資材を松明のように手に持ち、ポルメリアはホブゴブリンの群れをかいくぐってまだ倒れているギヤラウの側に寄る。心臓の再生も終わったギヤラウは首を捜して立ち上がるようにしていた。その落とされた首に松明をつっこむ。

肉の焼けるいやな音がして、そして立ち上がりかけた巨人は再び倒れた。もう動かない。

トラフスに残された手段はとっておきの死の呪文を投げる事だった。それとてポルメリアに何処まで通じるのか解らない。だがそれが最後の手段だった。

ホブゴブリンの群れと切り結びながらポルメリアがトラフスに近寄る。指揮を取っているのが彼だと気付いたからだ。通じれば速やかな死をもたらす呪文が彼女に放たれた。

一瞬、彼女は苦痛に金色の眉をひそませた。そして、それだけだった。

善の軍神の下僕は、信じがたい耐久力でトラフスの呪文の力に、あっさりと抗したのだ。

世の中には化物がいるものだ。

トラフスはそう思いつつ無駄と知りながら次の呪文を準備して、そして圧倒的な力で弾き飛ばされた。

壁に激突し、遠のく意識の中で自分の体がデタラメな角度に曲がっている事を知る。剣撃の音は遠のいていく。死とはこんなに簡単に襲い掛かってくるものなのだと、今まで自分が下してきた死もこんなものだったのだと、消え行く意識の中で彼はそう考えて、事切れた。

実質的な指揮官が死んでも、ホブゴブリンたちは逃げなかった。無双の剣の使い手である城主が健在である限り、彼らは手をつくして戦うのだ。だがポルメリアはそれをほとんど問題にしない。当たるを幸いになぎ払っていくだけだ。

投げ捨てられた盾のところへ近付く。精神感応ができる距離になると盾は自然に動き出しポルメリアの傍らに飛ぶ。後は剣と盾と、黄金の三つ編みを振り乱す彼女の乱舞だった。

盾が相手の剣を受け流す音、剣が相手の肉を断ち骨を砕く音、息も乱さず戦い続ける彼女は疲れも知らず、ホブゴブリンの兵士たちの間を駆け抜けていく。

そんな乱闘をキープの窓から見下ろしている目があった。金色の瞳に燃えるような赤い髪。ポルメリアよりも年下の少年の顔。少年は何の感慨もなく階下の喧騒を眺めていたが、たった一人で数十人の兵士たちを倒していくポルメリアを見て、やがて呟いた。

「呆れたものだ」

窓から少年は顔を上げ、同じ部屋で武装を身につけている城主に向き直った。城主は四十絡みの人間の男だ。見るからにまがまがしき黒い鎧を身につけている。

「あの娘、全部殺してこちらにやってくるつもりらしい。いやはや、善神の使徒という奴は元気なものだね」

少年は苦笑いを浮かべてはいるが、この城が追い詰められている事については何の心配も感じていないようだ。いや、そんな事は関心の外だといったげだ。

「ポルメリア・ランキンとはそういう娘だ」

箆手をつけ、ブーツを履く城主は何でもなさそうにそう言う。

「ああ、君はあの娘の師匠であり、元上司だったね。手の内は知り尽くしているという訳だ。勝算もあると？」

お気楽そうな少年の問いに城主は黒髪の頭を振った。

「ランキン侯の騎士団で彼女は十歳で騎士に叙され、十二歳で最強の騎士と言われた。

騎士団の誰もが、三度に二度、彼女に敗北した」

「師匠の君でもかい？」

「例外は存在しない。だから最強の騎士と歌われたのだ」

「んで、弟子に負けた腹いせに『善』から『悪』へ鞍替えしたって訳か。その成果はあったのかな？」

「・・・少なくとも金には困っていない」

「あちらも困っているようには見えないがね」

城主の武装も全て魔法の武器であり道具だ。しかしポルメリアもそれと同じか、あるいはそれ以上の武具を持っているようだ。

「噂では『城岩落とし』は、陥落させた城の宝石類を我が物にしているぞうだ。

『善』だろうと敵からは強奪して良いという事らしいな」

城主は侮蔑の笑みを浮かべた。しかし少年は階下の喧騒が何時の間にか静まっている事に気がついた。彼の耳には遠くキープの石畳、いや石の階段を駆け上がってくるポルメリアの足音が感じられた。

「君の部下は全滅したようだ。こちらに上がってくる」

「解っている。逃げはしないさ。ようやく彼女と命をかけた戦いができるのだからな。

言わずもがなの事だが、ワーム。貴方の手出しは……」

「言われたって出さないよ。僕は面倒な事が嫌いなんだ。それに、これは君の問題だ。僕には、まだ、関係はない」

城主は完全武装で隣の部屋へ移る。そこは謁見の間であり下からの階段により近い。

諸侯のそれに比べれば単なる応接間に近い部屋だ。しかしそれは城主であるランズベールが騎士団を辞め、祈りを捧げる相手を悪神に鞍替えして得たささやかなる支配の象徴だった。

グリムス・ランズベールはランキン侯爵の騎士だった。

だが閨閥主義であり、侯爵との婚姻や血縁がなければ出世が難しいランキン侯爵領での将来は絶望的だった。

それは侯爵の娘であり、明らかに自分よりも腕の立つポルメリアを知ってからますます感じる事だった。

自分が一国一城の主となる為には、ここにはいられない。

だがそう決心したグリムスよりも先に騎士団を抜けたのはポルメリアの方だった。

曰く、神の召命を受けたから、と。

彼女ならばランキン侯爵の騎士団長はおろか、近隣諸侯に名を轟かす大物騎士として名を馳せる事もできただろう。

それが神の召命を受けたからといって、やすやすと地位も名誉も、血族との関わりすら断ち切ったのだ。

グリムスは憎かった。

己が欲したものを軽やかに捨て去り、この世の富と名声をさらりとて捨て、神とともに苦難の戦いに赴いてしまった彼女が。

彼が騎士団をやめ、暴虐の限りを尽くし、この地を支配しようとしたのは、

そんな彼女への羨望と反発と、嫉妬と憎悪から思いついたのかも知れない。

その彼女がやってくる。もはや軽やかに響く鎧と足音も彼の耳に届く。グリムス・ランズベールは黒い大剣を構えた。今日ここで彼女を殺し、過去の執念と因縁を断ち切るのだ。

疾走する足音は止まりもせず扉を蹴破る。転げるように部屋の中に入ってきた彼女を殺すべく、初手から大きく振りかぶる。昔と変わらぬ、いやそれ以上に素早い身のこなしで、彼女はグリムスの一撃を紙一重でかわす。

石畳の床に剣は跳ね返り、金属音と火花を散らす。

グリムスの初手を見越していたようにポルメリアは転がりざま片膝ついた姿勢となり、グリムスの右足に鋭い剣を放つ。

飛び上がりそれをかわすグリムス。だが立ち膝姿勢の彼女が放つ、返す剣の方が早い。グリムスも黒い大剣でそれを受ける。

ポルメリアは無言で攻め立てた。グリムスは内心冷や汗をかきながらそれを凌ぐ。はつきり言えば気落とされていた。

彼女はかつての師匠も上司という感慨もなく、ただ殺すべき相手と心得て鋭い、計算された剣を放ってくる。一太刀一太刀で自分が不利な体勢なっていくのが解る。

昔の彼女は子供だった。身のこなしは素早い力が弱く、剣の打ち合いに持ち込めば勝てた。

それでも三度に二度も敗北したのは、彼女の打ち込みが素早いからだ。身を守る前に一本取られ、実戦では致命傷を受けた。今はそれに力と経験が加わっている。

グリムスとて遊んでいた訳ではない。

手段を問わないといえども部下を手に入れ、戦をし、城を手に入れるという事は並大抵の事ではない。

だがポルメリアは彼とは逆の事をたった一人で、二つ名にされるほど何度も繰り返してきたのだ。

悪逆なる支配者を、正面からねじふせ叩き潰す。それだけを幾度となく繰り返してきた。

その愚直なやり方は失笑をかい侮蔑される事もあったが、同時に恐怖や畏怖の対象ともなった。たった一人で城を落とす者。それゆえの『城砦落とし』。

体力でも自分が劣勢に陥った事をグリムスは悟った。

目の前で自分を追い詰めているのは、十五歳の少女の姿をしていても全然別な何かなのだ。

お互い致命傷にならぬ傷をいくつか負ったが、その痛みにうめき力が鈍る自分に対し、

ポルメリアは相変わらず怯みも疲れも見せず、ただその清冽な藍色の瞳で彼を見据えながら激しい打ち込みを繰り返す。

三年という月日は、更に二人の間の距離を広げたようだ。彼女は既に人間ではなく神の眷属なのだ。

一国一城の主になったとはいえ、ただの支配者でしかない彼とでは違いすぎた。

力が萎える。足がふらつく。かつて感じた事のない鎧の重みが自分の肩にのしかかってくるのが解る。

彼女に命乞いをするか？彼女は善なるもの下僕。救える命を無視する事はない。

だが、それが本当に通じるのか。彼女の清冽な瞳に慈悲はなく、敵対する者全てを滅ぼす決意が漲っている。

このままでは負ける。何か手を考えなければ。何かを！

だがその何かを思いつく前に、グリムスは足を滑らせた。

重々しい金属音とともに自分の体が高価な絨緞の上に横たわったのが解る。彼は思わず叫んでいた。

「待ってくれ、ランキンー！」

だが彼女は待たなかった。浮遊盾が彼の剣を押さえ込む。

同時にのしかかるように彼女は全体重を持ってグリムスの体に剣を突き立てた。

死の瞬間、グリムスの瞳をポルメリアの清冽な藍色の瞳が覗き込んだ。

「私には見える。同じような叫びを放つ者を貴方は待たなかった。

これだけの物を築くために、貴方は幾数百の命を奪い、貴方を信じる者、貴方を尊敬する者を裏切ってきた。さようなら、グリムス・ランズベール。貴方は良い剣の師匠でした・・・」

そこで初めてグリムスはポルメリアの悲しみに触れたような気がした。だが全ては遅すぎる。

彼の命の灯火は彼女の剣によって揺らぎ、消された。

グリムスの体から剣を抜いたポルメリアは疲れたようにうなだれていた。体が疲れを感じる事はない。

神に与えられたその力で、彼女は湧き上がる体力の続く限り戦い続ける事ができる。だが心の疲れまでは癒す事はできない。ポルメリアの記憶にあるグリムス・ランズベールは立派な騎士だった。高潔で部下思いの尊敬すべき騎士長。騎士団を離れ、悪を討つ流浪の人生を歩むと決めた時も、彼女を思いやり思いとどまるよう説得してくれた。それ以来、何が彼を変えたのか。彼女には知る術はないし、知ったところでどうにもならなかった。

彼女は剣を振るう事しか知らない。それによって敵を滅ぼす事。全てをまっ平にする事しか能がない。遅かれ早かれ、こうなる運命だったのだ。

彼女が善神の眷属であり悪を滅ぼすと誓い、ランズベールが己が欲望に負け悪に染まってしまったその日から。

しかしだからといって納得できるものではないし、それを飲み下せるほど大人でもない。

愚直に正面から城を落としにかかる手法からも、彼女は根は真面目で純朴な娘だった。

かつての師匠を手につけ、それを自分に納得させる事など簡単にできる事ではなかった。

そうだ。城主を倒したのだから狼煙をあげなければ。

彼女は今更のように思いついた。暴虐の支配者が倒された事を知れば、村人たちは奪われたものを取り返しにくる。

そこまでしてようやく彼女の事は終わるのだ。

疲れた足取りで彼女は横たわるランズベールの死体に近付く。せめて丁重に葬ってやるのがかつての師匠に対する礼儀だ。

だが、その時彼女は背後に異様な気配を感じて振り返った。まだ敵がいたのかと思いをこらす。

しかし一瞬にして視界に広がった赤黒い光に目が眩んだ。そんな事はかつてなかった事だ。

善なる軍神の召命を受けて以来、彼女は恐怖する事を奪われている。ゆえに何者にも臆した事は絶えてなかった。

背中にべっとり冷や汗があふれる。

なんだ、あれは。

彼女は再び剣を握りなおした。警戒するように浮遊盾が前に出る。

赤黒い光の向こう側にいたのは、ポルメリアより年下の、鮮やかな赤い髪の少年だった。

金色の瞳が楽しそうにこちらを見ている。彼を見た時、彼女はかつて感じた事のある恐怖を思い出していた。

恐怖？そんな馬鹿な。

いや、否定しても確かに体が覚えていた。彼女は、『コレ』を見た事があると。

「あらあら、結局皆殺しか。善の使徒といっても、やっている事は悪とかわらないようだね」

少年はランズベールの死体を見てそういった。

「・・・何者だ？」

注意深くポルメリアは尋ねた。

「何者ねえ・・・役どころとしては先触れ。しかしこの状況だとただの道化だね」

その言い方はいかにも軽くて気楽な様子だった。しかし少年の口調とは裏腹にポルメリアは一層警戒を強くした。『コレ』は見た目どおりのモノではない！根拠はなかったがそう確信していた。

どうみても旅の芸人か楽師という姿の少年に脅威を覚える事はないのだが、しかし彼女の目はそうは言わなかった。悪意を見抜き敵の強さを測る彼女の目が、今まで感じた事のない相手の強大さを見たからだ。

「彼はなかなか有望な城主だったんだけど、まあ君に殺されたんじゃないかね。残念だけど他を当たる事するよ。それじゃあ、失礼するね」

「待て！このまま逃がすと思っているのか」

精一杯の強がり。だがそれは相手に見透かされていた。

「待てと言われて君だって待たなかったじゃないか。哀れなランズベールは死体になってる。それに、見逃すのはこっちの方さ・・・解っているんだろう？ポルメリア・ランキン。『城砦落とし』」

最後の一睨みは笑っていなかった。

しかし、すぐに少年は愉快そうな高笑いを響かせて、そのまま入ってきた扉の向こうへ行ってしまった。瞬時の金縛りの後、慌ててポルメリアは隣の部屋に行く。既に、そこに彼の姿はなかった。

しかし彼女の用はそれで終わりではなかった。頑丈な宝箱を見つけると鍵を探す。

ランズベールが身につけていたそれを鍵穴に当てると、鍵は軽やかに開いた。中には大量の金貨と宝石が入っている。ランズベールの軍資金に違いない。

ポルメリアは大粒の宝石にのみ手を伸ばす。魔法の武器を、防具を、道具を。更に手を加え、更に強力にする為には金がいる。それらを使って更に強力な『悪』を滅ぼす。結果としてそれは人々の為になるはずだった。

しかし、やっている事はそこらの強盗と同じだ。

先ほどの赤毛の少年の言葉が胸に刺さる。善も悪も、やっている事は同じだな。

違う・・・そう思いたい。少なくともポルメリアは金や食糧を根こそぎ我が物にはしない。だが持ち運びしやすく、価値のある宝石ばかりを選んでいる。

ランズベールの武具や道具とていただいでいく。

悪に利用されないように、といたながら魔法道具を商う者たちに売り飛ばし金に変える。彼らが悪に転売しないと誰に言えるのか。

城内の自分が殺した死体を集める。資材やおが屑を集め火を点す。例えまとめてであろうとも、悪は敗者を吊ったりはしない。だが、それとて戦いが終わったと村々のものたちへの合図の変わりだ。

死体の焼ける嫌な匂いが立ち込める前に、ポルメリアは逃げ出すように城を出た。

農民たちは、解放された城を、食べ物、金を見つけるだろう。飢えを凌ぎ、奪われた自分たちの財産を取り戻すだろう。だからどうだというのだ？守るものがない城などたやすく落ちる。

今度やってくる支配者が良き者であると誰に言えよう？ランスベールよりも質の悪い山賊でないと誰に言えるだろう？

ポルメリアにその全てを負える力などない。彼女はランキン侯爵の騎士団最強の騎士だった。

だがそれだけだ。言ってみれば敵を滅ぼすより他に能などないのだ。その事を彼女自身が痛いほど弁えている。

彼女にできる事はそれだけ。たったそれだけなのだ。『悪』と呼ばれる者を滅ぼす事しかできないのだ。

彼女は再びフードとマントで我が身を覆い、疲れる事のない体を休める事なく、次の目的地へと旅立っていく。だが心は満たされる事のない旅に疲れ果てていた。

これが、『悪』を滅ぼすと誓い、善なる軍神の召命に答えたものの定めなのか？

その問いに答える者はなく、彼女はただ帰る道のない戦いを続ける他ない。

清冽なる藍色の瞳にのみ一点の曇りもなく、殺し合いだけが待つ次の巡礼地へと疲れた心を癒す事なく急ぐ。

彼女の名はポルメリア・ランキン。

またの名を『城砦落とし』。

畏怖と嘲笑にまみれて。